

〔文献紹介〕

桑原公徳著 地籍図

日本の歴史地理というシリーズ中の一書である。他書の場合には日本の歴史地理上のあるテーマ（それが書名にもなる）につき、まとめたものであるが、本書では「地籍図」そのものを歴史地理学的に解明しようとしたものではない。歴史地理（より広く人文地理と）といったほうがよいかもしれない）の研究資料としての地籍図の有用性を強調し、著者自身の研究にもとづく豊富な研究事例を掲げ、その保存方法をも提言する。地理学や地図史の本ではなく、地籍図利用を主としたすぐれた人文地理研究法の本だというのが、読了して強く印象づけられた点である。全九章の内、一と九を除く七章が研究事例に当てられ、条里・中世城郭・籠集落・近世宿駅・たたら集落・土地利用・植民地区画と時代的には古代から現代まで、地域的には北海道から南九州に及び、分野としても多彩である。更にこれでも充分でないとして、第九章のなかばを使って豪族屋敷村・新田村落・島畑・旧河道の事例を附加している。

これらの研究事例の大部分はすでに論文等として発表されているとの事であるが、原論文を所持し読了している人にとっても改めて学ぶ所、得る所が多い。論文としては書く事のできない、具体的な研究動機、研究の手順、更に苦心談等が豊富に織りこまれているからである。多くの読者、特に初学の人にとって一番知りたいと思うことで「論文」にはでないことが懇切に説かれているのがこの本である。「研究法の本だ」と書いたゆえんであり、「研究法」と銘打ってある本以上に役に立つ。これから卒論準備に掛ろうとする学生諸君に第一に読ませたい本である。たとえば第五章、ここでは

中山道醒井宿を事例に宿場町研究の具体的方法がそれこそかゆい所に手がとどくような丁寧さで述べられている。

地籍図の地図学的検討はなされず、利用者としての立場で終始されているが、歴史地理研究者の片手間にやれるようなことでなく、地図学・地図史の分野の人達も地籍図までは手がまわり兼ねている現状では止むを得ないことと思う。この分野の専門家があらわれ、その成果をふまえた一章が附加される日を待望したい。

第九章の「地籍図の利用状況」の中で歴史地理学紀要（十七集まで）を事例に、論文二〇二篇中、地籍図を利用したのの一三篇に過ぎないと利用度の低さを指摘されたのは耳の痛い所である。私のもなど差当り、氏のいう「地籍図を利用していないもののうちで、その利用が必要のように考えられるもの」ないしは「利用が望ましいもの」に該当するだろう。しかし地籍図を利用しなかったのではなく、研究の過程で利用はしたが、知り得た事項を記すに止め、論文に地籍図自体を掲げなかった事が何度かある。ほかの人でも同様のことはあると思われる、実際の利用度は氏の言われるよりは高いものと思われる。しかしそのような生ぬるいことでなく、積極的に地籍図を論文に掲げるべきだと本書を読んで感じた次第である。

なお、地籍図の法律的意義（第一章の内）は今まで知らずに使っていただけに教えられる所多く、地籍図の保存問題についての提言（第九章）に全面的に賛意を表したい。書中折々に記されている感想には世代を同じくし、よく似た人生コースを歩んできた私には共感を覚えることが多い。B6判、二四五頁、昭和五十一年一月二五日発行、学生社、一、二〇〇円

（中島義一）